リハビリテーション科学部
言語聴覚療法学科 編

OB訪問

今回ご紹介するのは、緑深い森を背に札幌の街並みを見下ろす札幌西円山病院に勤務するST（言語聴覚士）川岸さん。卒後4年目の夏を迎え、チーム医療の一員として、高次脳機能障害リハビリの専門家として、大きく成長中です。

札幌西円山病院 言語聴覚士
川岸 優樹さん（心理科学部言語聴覚療法学科※ 2013年3月卒業）
※2015年度よりリハビリテーション科学部言語聴覚療法学科

リハビリは多職種連携で

札幌西円山病院はQOL（クオリティ・オブ・ライフ／生命・生活・人生の質）を尊重した高齢者医療・ケアで知られます。900人を超える職員が働き、川岸さんの所属するリハビリテーション部スタッフもPT（理学療法士）、OT（作業療法士）、ST（言語聴覚士）合わせて185人（2016年4月現在）を数えます。看護・福祉・リハビリ、各部門で本学卒業生も多数活躍中です。

川岸さんは回復期病棟で、嚥下障害、認知症、高次脳機能障害などの担当患者さんに対し、発声、発語や嚥下（飲み込むこと）の訓練を行っています。患者さんの入院期間は約半年、その間にPT、OTと共に定めたゴールめざして、患者さんを全人的にとらえてリハビリを実施します。脳卒中で起き上がることも困難になってしまった患者さんが半年のリハビリで着替えや食事、車いすの乗降を自分でできるようになったら、それはPT・OT・STの専門性と、しっかりとした協働の成果なのです。

患者さんの願いをチームで

回復期病棟のリハビリは 月に1度、医師、看護師、PT、OT、ST、介護福祉士、医療ソーシャルワーカー、管理栄養士が参加するカンファレンスに基づいて行われています。「退院後の生活を考えたリハビリのゴール、方法はもちろん、入院中の希望もできる限りかなえられるよう取り組みます。例えば『外出して買い物したい』と希望された場合、車いすで何時間なら上体を起こしていられるか、移動、飲食、トイレなどをどうするか、様々な視点から検討します」と川岸さん。その細かさは「この患者さんはAショッピングセンター内のB店の、あのメニューなら食べられる」という具体例に及ぶといいます。

17時を回るとリハビリスタッフが病棟から一斉に戻ってくるスタッフ室。ST、PT、OTの境界がなく、その規模に圧倒されます。5人の若手ST、前列左は十川舞さん（本学2012年卒）、右は川岸さんが頼りにしている先輩ST長谷川弥生さん、後列左は川岸さんの本学の同期で親友・進藤翔さん、右は坂上佑斗さん（本学2015年卒）。

高次脳機能障害の専門家として

STの専門領域には、けがや病気で脳に損傷を受けて起きる認知機能全般の障がい（高次脳機能障害）があります。STは脳の部位が司る機能の専門家でもあるのです。損傷した部位で異なる障がいを、検査などで特定することもSTの役割です。

「2度の脳梗塞で左前頭葉と右頭頂葉に損傷を受け、会話でのコミュニケーションにはほとんど影響がないものの文字が書けなくなってしまった患者さんがいらっしゃいました。構成失書という障がいです。2画の文字も書けない状態でしたが、習慣だった日記を再開したいという強い意志をお持ちで、半年で13画の漢字を含めた短文の模写ができるまでになりました」。「非常に難しいケースでした」と振り返る川岸さん。STとしての幅を広げる手応えを感じるケースでもあったようです。

舌圧子（木のへら状）を舌先にあて200gの力で押して舌圧をみる(左)、唾液や食物が残っていないか耳で確認する（右）、その感触と健常者の状態を忘れないよう、ST同士での確認は欠かせません。世界的なプロ野球選手が素振りを欠かさないのと同じです（川岸さんは野球少年でした）。

年次目標：学会発表

川岸さんが就活中に札幌西円山病院を志望した理由は大きく2つあったといいます。一つは唾液も飲み込めないような重症の患者さんであっても口から食べることをあきらめないというリハビリ方針への共感。もう一つは、絶え間なくスキルアップを図るための充実した研修・指導体制でした。STにも1年目から年次目標が定められ、4年目の川岸さんには今年は学会発表が待っています。「勉強したい」意欲を持ち続ける川岸さんの成長に、弾みがつく機会となりそうです。

川岸さんは昨年のオープンキャンパスで、本学の同期、現在は職場の同僚である進藤翔さんと一緒に卒業生講演をしてくださいました。個性異なる二人の学生時代、STの仕事にまつわるリアルなトークは高校生に大好評でした。川岸さん、未来を担う若きSTとして、これからもその仕事の魅力をどんどん発信していってください。